

# メタノイア 2025 - 2026

——マヤの数学と天文学から見た脱社会化とカタルシス——

高橋徹

あなたがたの世界の先入観が多くの慣習や定説を脳に植えつけ、理解を妨げている……

科学技術社会の生活の中では、人間の意識はこの世界の枠組みと社会通念にとらわれて奴隷と化してしまっている。科学技術の世界が存在できるのは、人間の意識の自由が完全になくなり、人間の意識が征服され、意識のエネルギーが吸収されている条件においてだけ

## はじめに——メタノイアとは何か？

本論のタイトルにあるメタノイア (metanoia) の原語は、ギリシア語である。英英辞典で調べてみる、「心の根本的な変化」とか、「霊的・精神的な転換」と説明されている。メタ (meta) は「後に、変化して、越えた、共に」といった意味を持ち、ノイア (noia) にはギリシア語のヌース (noos) と同じく「知覚する、考える、思う」といったニュアンスがある (パラノイアの「ノイア」と同じ) ので、このような定義になるのだろう。日本語では、「心の変化」あるいは「悔い改め」「転向」「回心」などと訳されることがある。

本論は、「人間ひとりひとりの心と知覚のあり方が二〇二五年前後に転換する可能性がある」という天文周期的な仮説や問題意識について語る。この転換の可能性を「メタノイア」という言葉で表現し、〈二〇二五年に向けて、知覚の転換のタイミン  
グは今だ | | われわれの考え方や知性のあり方そのものが大きな変化を迫られている〉という意味合いを表題に持たせた。したがって従来のキリスト教的なメタノイアという慣用的な語法における「告解」とか「悔悛の秘跡」というニュアンスを特に意識しているわけではない。

では、なぜわれわれは変化を迫られているのだろうか？ひとことでは説明できないが、誤解を恐れずに言えば次のようになる。すなわち、われわれは現実の事象や物事のごく断片しか認識しなくなってしまった。目に見える表層的なものの背後には目に見えないエネルギー的な流れや本質というものがあるが、われわれはいつのまにか後者のエネルギー的な側面を直接、知覚することができなくなったのだ。もし人間がエネルギーをそのまま知覚できていれば、もっと別な生き方が可能になっていただろうし、人間を息苦しくさせるような人工的な環境を作り出すことはなかっただろう。

そして、われわれをとりまく現実というものの認識をもっと拡大しなければ、われわれはもはやどこにも進むことができないし、今、袋小路に直面していることにさえ、まったく気づけなくなってしまう。したがって、本稿の執筆にあたって前提にしたことは、繰り返しになるが、われわれ人間が地に堕ちて、目に見える表面的なものだけを認識し、現実のその他の領域に関しては完全に盲目かつ鈍感になってしまったということである。

人は今、この文明社会で自分の身に何が起きているのかを知る必要がある。ひとこと言えば、今起きているのは感受性の崩壊や鈍化であり、思いやりや共感意識の欠如なのだが、それらは目に見える、はっきりした現象ではないためにとらえがたい。こうした崩壊や鈍化が、この一世紀半ほどのあいだに極度に進行した。それを個人主義とか物質主義とかいう言葉だけでは片付けることはできない。あまりにも大きな崩壊現象だからである。

では、どうしたらよいのか？まず現状を知る必要があるが、その現状を知ることがそもそもできない。これがいちばん大きな問題かもしれない。つまり、何が本質的な本当の問題なのかを知ることができないということが、いちばんの問題なのである。

このような認知の暗闇状態から新たな知覚を立ち上げ、より深く現実を認識するための一助となることを本論は意図している。

なお、本論「メタノイア2025」は、二〇二五年から翌年にかけての時空において、あたかも空中にホバリングするヘリコプターあるいはUFOのように、微細に震えながらも静止したままその内容を保持している。本文で述べるように海王星が二〇二五～二〇二六年に春分点を通過しても、おそらく社会全体にはそれと同期して、その海王星の力を活かす感受性も器も用意されていないだろう。だから本論では、まず個人がその心がまえというか態勢を準備することに主眼が置かれる。「知覚の転換」が二〇二五年の時空および人々の意識とシンクロするとき何が起きるのか、それに焦点を当て、注目していきたい。

なお、本論では説明に必要な最小限の天文学関連の用語を使用した。本論の最後にある【注】の前に、使用した専門用語の解説を掲げるので、必要に応じて参照してもらいたい。※なお、この用語解説のほとんどは、小学館の『デジタル大辞泉』の記述を元としている（一部、内容を追加し、アラビア数字を漢数字に変更した）。